



実行して得られる正統性

今読んでいるのは、エマニュエル・トッド他『世界の未来～ギャンブル化する民主主義、帝国化する資本主義』（朝日新書、2018）という本で、インタビューや講演をもとにしているために、論理の飛躍があつたりするのだが、書かれている内容は、まさに現代社会が抱えている病理をテーマにしておもしろい。政治・経済学部系を目指す人は、語り口調が基本で読みやすいし、そもそも200ページにも満たないものなので、ぜひ読んでおいてほしい。

その中から、ちょうど今日読んで印象に残った部分を引用してみよう。民主主義の陥っている危機を分析した、コレージュ・ド・フランス教授、ピエール・ロザンヴァロン氏の講演「ポピュリズムと21世紀の民主主義」の一節である。

*

市民にとって、民主主義の欠陥とは声を聴いてもらえないことです。つまり何の相談もなくものが決定されるということです。大臣たちは責任を果たさず、指導者たちはウソをついても罰せられない、癒着がものごとを動かす、政界は内輪の論理でふるまい、説明しない、行政は不透明なまま。

*

短い一節だが、これを読めば、誰だって現在の日本の政治状況を思い浮かべずにはられないはずだ。

例えば、「（国民に）何の相談もなく」の一節。さまざまな重要案件が、そのようにして決まりつつあるのではなかろうか。敢えて例は挙げないが、君たちにも思いつく事例があるはずである。こういう時、適切な事例を

挙げられることが、慶応を初めとする小論文の試験では重要なポイントとなる。

また例えば「大臣たちは責任を果たさず、指導者たちはウソをついても罰せられない」の一節。ここ数日間の国会に関する報道を読めば、まさに…といった印象である。（ズバリ「ウソ」という語が、国会の場でやりとりされた。） 国有地払い下げ問題や、某大学の学部新設問題などは、「癒着がものごとを動かす」事例に相当するのかも知れない。もちろん、まだ真相が解明されていないことについて断定的なもの言いは避けたいが、報道されている内容を見る限り、「政界は内輪の論理でふるまい、説明しない、行政は不透明なまま」といった状態が常態化している印象を、多くの人が持たざるを得ない状況となっているのではなかろうか。

その結果、民主主義に対する信頼がゆらぎ、それが投票率の低下といった現象に結びついてゆく一つの原因となるという分析がなされている。よく権力者は「選挙によって信任された」という言い方をするが、ピエール・ロザンヴァロン教授によれば、

「認可されて得られる正統性と実行して得られる正統性を分けて考えるべきです。選挙では代表としての役割を認められて正統性を得ます。しかし、それは日々、証明しなければなりません。」

ということになる。「認可され（選挙で選ばれ）」ただけではだめで、その後の行動でこそ正統性が判断されるというのである。

間もなく諸君も有権者。小論文のためだけでなく、社会に関心を持ちたいものだ。